

現代若者文化と「場所」（１）都市の若者論を再考する

日本女子大学 木村絵里子

1. 目的と方法

多くの若者研究では、これまで「都市の若者」を「時代のリトマス試験紙」として位置づけてきた。例えば報告者が参加している青少年研究会でも、大都市部に居住する若者を対象にして統計調査（1992、2002、2012）を実施してきたが、新しい世代文化に着目する場合、行為の自由度・可処分所得・学歴が高い都市の中産階級の若者が「新しさ」を具現することが多く、対象として適していると考えたのである（青少年研究会、1995、『都市と世代文化に関する実証研究』科学研究費補助金研究成果報告書）。つまり、こうした「都市の若者」を通して「日本の若者」（ひいては社会）を捉えるというやり方が採用されてきたわけなのだが、このような前提は、現在、どれほど有効だといえるのだろうか。

本報告では、戦後の社会学における若者（青年）研究を概観し、いかにして「都市の若者」が注目され始め、「都市の若者≒日本の若者」という図式が設定されたのかを確認する。その上で、この図式の現在における問題を提起する。

2. 結果

「時代のリトマス試験紙」としての「若者」という位置づけは、若者にみられた変化から、社会変動を読み取り得ること、若者の変化や新しい価値観が次代の社会の仕組みを方向付けるということを前提に成立していた。とりわけ「都市の若者」に対する注視は、戦後の日本社会が「都市化」を迎えるなかで始まる。都市の若者こそが、都市化という社会変動を先鋭的に示しているという見方がなされたのである。その後も、都市は、青年文化（ユース・カルチャー）や消費文化、情報化などの新しい生活様式、そして独自のコミュニケーション様式との親和性を備えており、都市の若者のなかから先端的・典型的な特徴を抽出し、それを通して若者の動態（あるいは社会）を捉えていくという方法が用いられてきた。都市の若者は、これらの多様なトピックを理解するための一つの切り口であったともいえる。

しかしながら今日では、都市の若者が日本の若者の代表であると安易に措定することは難しい。地方在住の若者の地元志向など、都市の若者とは異なる独自のライフスタイルや価値観に注目が集まっているように、都市の若者の価値観や行動様式が後に全国へと波及していくという見方は、もはや一面的なものに過ぎない。さらには、近年における都市、または地方のあり方、そしてこれらの関係自体の変容も、当然のことながら「都市の若者≒日本の若者」という前提を揺るがしている。

3. 結論

そこで従来の若者論のなかで前提とされてきた「都市の若者≒日本の若者」という図式の有効性を検証する必要がある。以下の我々のグループによる連携報告では、これらを「場所」という観点から多角的に検証する。まず「都市／地方」における違いを確認することは何より重要である。ただし、若者にみられる差異は、必ずしも都市／地方の間に存在しているとは限らない。例えばパートタイム的に消費されるような何らかの意味が付与された場所、またはインターネットのような空間のなかにも何らかの固有性を見出すことができるかもしれない。上記の図式に対する新しい視点からの検証が求められているのである。